

▼書評

姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』

(青木書店、二〇〇九年二月、一・二九七・三二頁、三五〇〇円＋税)

小野寺拓也

本書は、「啓蒙の世紀」であると同時にジェンダー秩序の形成期でもある一八世紀に主たる焦点を当てた第一部「近代的ジェンダー観の形成」と、そのジェンダー秩序がどのように再構築され変化したのかを論じる第二部「社会変動とジェンダー」とに大別され、後者はさらに文化、教育、労働、家族、セクシュアリティ、女性運動、ナシヨナリズム・男性性という七つの領域に分かれている。収められている論文は、トピックも含めて二二本。執筆者のバックグラウンドも、歴史学を中心としながらも文学、美学、法学、教育学など多岐にわたる。従って、その全ての論文を要約した上で逐一的確なコメントを加えることは、紙幅の制約からも評者の能力からも到底不可能であり、断念せざるを得ない。そこで本書評では、編者姫岡とし子(執筆者は以下敬称略)が「はじめに」で挙げている本書の特徴を手がかりにしながら、本書がどのような方向性を全体として有しており、それぞれの論考ではそれがどのように論じられているのかを浮き彫りにした上で、ジェンダー研究の今後の方向性について、研究をとりまく社会状況も絡めながら最後に論じた。各論文には論旨に応じて適宜触れるという「つまみ食い」的な言及になっってしまうが、その点どうかご理解いただきたい。

姫岡が挙げる本書の特徴は、以下の四点である。①ジェンダーの差異が社会構成の基盤となるという観点の確認。②ジェンダーの差異化が特に著しい、啓蒙時代から一九世紀初頭及び、一九世紀末から二〇世紀初頭という二つのピーク(そして脱構築へと向かう一九七〇年代以降)。③市民的階層性、ナシヨナリティ、人種とジェンダーの絡み合い。④男性史に一項目を割り当てたこと。

①は「ジェンダー史入門」を標榜する以上当然とも言えるのだが、②から④には、ジェンダー史研究をより緻密で、隣接領域に開かれたものとするための重要な論点がいくつか含まれている。まず②について言えば、ドイツにおいて啓蒙期から一九世紀初頭にジェンダー規範の基礎が形成され、それが世紀転換期に急進化したことは事実であるとしても、逆に言えばジェンダー秩序は動的なものであり、時代によって少なからず変化しうる(脱構築の方向へも向かいうる)ということでもあろう。ジェンダー秩序の可変性というこの視点は、静的な二項対立へとやみくもに論点を収斂させず、つねに構築性を意識しながら議論を進める上できわめて重要である。この点において優れている論考が、大貫敦子「死へと誘う「若き英雄」の肖像」である。「英雄的死」をめぐる言説を手がかりに男性性の範囲の変化を分析するこの論考では、規範イメージの一世紀以上にわたる長期的な変化だけでなく、第一次大戦後に称揚された「新しい人間」というハードな男性性言説の裏にはどのような過酷な現実があったのか、言説分析だけにとらわれることのない目配りの利いた議論がなされている。

③の「絡み合い」は「インターセクシヨナリティ」、すなわち「社会関係や主体形成の多様な次元や様態をめぐる諸関係」(Saldem 2009)と

も表現できるであろう。階級、ナシヨナリテイ、人種、さらにはエスニシテイ、セクシュアリテイ、世代、宗教、障害の有無など、さまざまなカテゴリーとの関係性の中でジェンダー概念を捉えるということ。そして、それぞれのカテゴリーを閉じたもの、自己完結的なものとしてではなく、相互に影響を及ぼしあい変化していくものとして捉えるということである。これは、女性内の差異を丁寧に見るために必要であるだけでなく、近代における広い意味での「他者」イメージの変遷を考える上で重要である。すなわち、近代ヨーロッパ国民国家の主たる担い手が白人・中産階級・成年男子であったことの裏返しとして、植民地・労働者／貧困層・子ども・敵国、そして女性が「劣った」他者とみなされる基本構造は厳として存在するのではあるが、実際に誰が「他者」カテゴリーの中に投げ込まれるのかは、時代的文脈によって変わってくるからである。たとえば原田一美「ヒトラー・ユーゲントによる「教育」で指摘されるように、人種原理に基づく「我々」意識が支配的なナチ期においては、人種の方がジェンダーよりも総体としては重要なカテゴリーであった。

このインターセクシヨナリテイという問題意識を最も鮮明に打ち出しているのが、弓削尚子「啓蒙の世紀」以降のジェンダーと知」である。身分制社会の価値基準が動揺する中で、啓蒙を担う新興教養市民たちが構想した来るべき秩序原理が、「科学的」枠組みに基づく男女の「絶対的」「客観的」差異であった。弓削論文は、この「科学的」根拠の中に階層・ナシヨナリテイ・「人種」といった問題があらかじめ包摂されていたことを、市民性のアンチタイプ、コロニアルな言説、科学者の間での「男たちの絆」や「アグノトロジ」(ある文化的・政治的文脈によって「抹殺された知識」を研究する方法)など多面的な視角から浮

き彫りにするもので、ジェンダー概念のインターセクシヨナリテイを鮮やかに描き出している。原葉子「性的成熟期」と「更年期」のジェンダー化」は、性的成熟をめぐる言説の中で、人種差別がジェンダー間の優劣とともに社会秩序の中に組み込まれていったことを、北村陽子「第一次世界大戦と戦争障害者の男性性」は、「男性らしさ」と身体的な頑強さが同等視される社会にあつて、身体の欠損にもかかわらず扶養者義務を果たす戦争障害者は「男性らしい」と評価される一方、戦争による障害を強調して軍人年金額引き上げを要求する者は「女々しい」と批判されたことをそれぞれ指摘する。

④男性史について姫岡は、「男性の実体」の解明ではなく、男女の差異化によって男性性が構築されていくことに本書の立場があると述べ、ここでも構築主義の立場を強く打ち出している。これは単に女性史と男性史を突き合わせること留まらず、男女という二極によって秩序が構築されているという「全体像」を視野に入れておくことを意味する。その点、その二極秩序を根底から問い直そうとするクイア理論に関する論考がなかったのが、悔やまれる。

しかし以上の四点だけでなく、もう一つの隠れた論点が本書には通底しているように、評者には思われる。それが、⑤エイジェンシー(行為主体性)の問題である。近代的なジェンダー秩序がいかに(恣意的に)構築されてきたかを明らかにし、「客観性」の背後にどのような権力・利害関係が潜んでいるのかを暴いてこれを批判すること自体は、勿論重要ではある。しかし、もう一人の編者川越修も示唆しているように(二〇六頁)、そのような大きな問題性をはらんだ、「虚偽」とも表現しうるような意識が、なぜ(少なくとも)二世紀以上にわたって日常的に維持され、再生産されてきたのだろうか。教育や社会化、秩序や権

力構造による様々な形での強制は当然重要な役割を果たしてきたであろうが、秩序を維持・再生産していく（女性を含む）人々の論理、一人一人の「主體的な営み」を理解することなくして、近代ジェンダー秩序の「生命力」を説明することは困難であろう（水戸部由枝「売買春のポリテイクス」も売買春の問題を手がかりにしながら、同様の問題意識を提示している）。エイジェンシーの観点を十分考慮しない言説分析は、「当事者が生きる複雑な現実を、十分に説明しがたい静態的な見方ともなりうる（石井香江「ドイツ郵便における労働のジェンダー化」、一五〇頁）」。

姫岡とし子「労働とジェンダーをめぐる研究視角の変遷」は論考の最後で、この問題を論じている。姫岡いわく、言語論的転回以降の言説による権力作用の分析では、人々が「ジェンダー化される受け身的な存在」、「歴史の客体」となってしまう、言説分析は体験をする主体を概念的に否定するものであるという批判が日常史研究などからなされることがあるが、それは誤解であって、一人一人の女性もジェンダーの構築に参与したり、再生産したり、適応したり、意味をずらしたりなど、歴史過程にはたらきかけ、影響を及ぼしている（二三八頁）。これは、理論的には正しい指摘であるかもしれない。しかし日常史研究の批判はおそらく理論自体ではなく、個や経験をしばしば安易に「原因」でもあり「結論」でもあるところへの構造へと収斂させ、その結果構造を過度に実体化させてしまう研究者の態度そのものへと向けられている。たとえば秩序の「再生産」といっても、エイジェンシーを丁寧分析すれば、構造によって規定されたというよりは、彼ら・彼女らの（ある程度自律的な）論理や心情に従ったあげく、結果として「再生産」する側に立つことになったという事例も多々あるのではないだろうか（無意識のうち

に秩序を内面化しているということは大いにありうるとしても）。

しかし姫岡のもう一つの論考「ドイツの女性運動と領域分離」は、そうした疑問にかなりの程度応えるものとなっている。穏健派市民層女性組織による活動を、ネイション・ナショナリズムとジェンダーとの関係から考察するこの論考において姫岡は、ナポレオン戦争期の女性協会について、「支配的なジェンダー観を受容し、会員自身もジェンダー化された領域と役割の範囲内で活動することにより、ジェンダーの構築と強化に寄与する」一方、「ネイションという大義名分によってジェンダーの境界を越え、公共圏に参加し、活動範囲を広げていった」（二四〇頁）として、その「二面性」を指摘する。また二〇世紀初頭の反女性解放組織に多くの女性が参加した理由として、「二〇世紀初頭に女性の大学入学が認められ、職業進出も活発になるなかで、自分たちが「古臭く」「価値のない」存在に陥り、ドイツの女性とキリスト教的と受けとめられている母親が脅威にさらされることを危惧した」（二五一頁）点を挙げる。

前掲の石井論文も「女性郵便・電信官吏同盟」という女性組織を中心に、市民層女性の性道徳と身分意識を論じている。「適当ではない人材の侵入」（「階層の低い女性の職場進出」）に反対し、女性官吏にふさわしい「風紀と道徳」、「名誉」の擁護に取り組み、「独身義務条項」に反対する際の論拠として優生学を持ち出すなど、この組織が男性中心の組織同様概して保守的であった理由について、石井は次のように指摘している。「女性としてカテゴリー化された集団が何かを要求しようとするとき、戦略的に男女の差異を強調し、「母性」といった女性の「特性」に訴える傾向がある。この場合、本来的な女性・男性のあり方という「本質」が同時に立ち上げられ、この枠に収まりきらない存在が排除さ

れる」(二五六頁)。これは、先に述べたジェンダー秩序の「生命力」の一端を説明するものとして、説得的な議論である。

石井自身認めるように、こうした中間組織の言説に現れる規範がすべての女性官吏に受容されていたかどうかはわからないし(一五七頁)、よりミクロな次元も考慮する必要がある。しかし、ジェンダー秩序とエイジェンシーの双方を視野に入れろつという点で、中間組織の言説分析が相当程度有効であることを、姫岡・石井論文は改めて示していると言えよう。

女性運動・ウーマンリブから、「女性史」を経て「ジェンダー史」へ。早島瑛が挙げる、新しい学問が市民権を得たかどうか判断する上で三要件、①その学問のための講座が新しく新設され、その学問を研究し、講義を担当する教授の職がいくつかの大学にあること、②機関誌の創刊、③その学問分野の学会があること(早島一九九五・一七二頁)を、日本におけるジェンダー研究はここ数年の間に急速に満たしつつある。そうした中で、「批判の学」としての原点を見失うことなく、しかし研究をとりまく環境変化にどのように対応するのか。ジェンダー研究は今、そうした過渡期にあるように思われる。

特に「批判の学」としてのジェンダー研究にとってきわめて重要なのが、一九九〇年代後半以降の日本社会の急激な変容である。正社員あるいは自営業者とその妻という「モデル家族」像、それに基づく社会保障制度、家族・教育・労働のトライアングル循環、いずれも完全に失効したとは言えないにせよ、目詰まりを起こして機能不全に陥りつつある。つまり、ジェンダー研究の批判の前提となっていた社会的諸条件自体が、行き詰まりつつあるのである。そうした中で、近代批判、マイノリ

ティの立場からのマジヨリテイ批判、多様な価値観の擁護という、フェミニズムを含む「一九七〇年パラダイム」(小熊二〇〇九)は、批判すべき近代やマジヨリテイ、主導的な価値観が厳然と存在していたからこそ有効な議論であったのではないか、「一九七〇年パラダイム」が唱えた「自由」の思想は、確固とした「安定」の理念があったからこそ成立していたアンチテーゼであり(その「安定」がたとえ「平等」や社会的公正とは似て非なるものだったとしても)、単体では意味をなさないものだったのではないか(高原二〇〇九)といった疑問・懐疑が、近年一気に噴出して印象を受ける。

評者がこうした問題に対して確固とした見解を持っている訳ではない。ジェンダー史と「メインストリーム」との関係も、そう一筋縄ではないかない問題であろう。ただ、本書で提示されたジェンダー秩序の可変性、インターセクショナルリティ、エイジェンシーという方向性は、一つの望ましい展望ではあるように思われる。様々なカテゴリーやアイデンティティが錯綜する中で、ジェンダーはどのような位置づけにあり、他の概念とどのように交差しており、どのような文脈で変化し、人々はそれにどのような意味を与え、どのようなプロセスを経て我がものとしていくのか。そうした「全体性」を常に意識しながらジェンダーの諸問題に取り組むことが、「一九七〇年パラダイム」の遺産を本質的なところで継承しながらもその限界を乗り越えていく上で、今ジェンダー研究者に求められているのかもしれない。むしろそれは、評者自身が研究の上で格闘していかなければいけない、とてつもなく大きな課題でもあるのだが。

【参考文献】

早島瑛、一九九五、「社会と国家のはざまで」、竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』、有斐閣、一四一―二〇五頁。

小熊英二、二〇〇九、『一九六八（上）（下）』、新曜社。

Saldern, Adelheid von, 2009, "Innovative Trends in Women's and Gender Studies of the National Socialist Era", in: *German History* 27(1), pp.84-112.

高原基彰、二〇〇九、『現代日本の転機——「自由」と「安定」のジレンマ』、日本放送出版協会。

（おのづら たくや・共立女子大学非常勤講師）

